

「生活力」としての「言語力」： 小学校英語の場合

——コミュニケーション能力の伸長を目指す文字学習に焦点をあてた試み——

上越教育大学 北條 礼子

小学校英語における生活力としての「言語力」

小学校英語における生活力としての「言語力」とは、なんであろうか。まず、頭に浮かぶのは、やはりコミュニケーション能力ということになる。実際、近い将来小学校に英語が導入されることが予想されているが、現状はそのための準備があまり整っていない。確かに、アジア諸国をみても小学校段階で英語を教科として教えていない国はほとんどなく、同じEFL（外国語としての英語）環境にある中国、韓国、台湾と比べても小学校英語教育ははるかに遅れを取っている状況にあるといっても過言ではない。

本稿では、文部科学省中央教育審議会教育課程部会分科会「外国語専門部会」が日本の小学校英語をどのように位置づけているのかと文部科学省の調査結果から小学校英語教育の現状がどのようになっているのかをまとめ、次に児童・生徒の文字指導への意識に関する調査結果について述べ、最後に、コミュニケーション能力の一つであり、教員、児童にとって現実的に必要であり実現可能な文字に対する理解を伸張させる文字指導の例を紹介する。

1. 小学校英語の位置づけ

平成18年3月に文部科学省中央教育審議会教育課程部会分科会「外国語専門部会」が審議結果を報告した。「外国語専門部会」による報告内容は、①

小学校における英語教育の現状と課題，②小学校における英語教育の目標と内容，③小学校における英語教育に関する教育条件，④小学校における英語教育の教育課程上の位置づけ，の4点にまとめられている。

ここでは，このうち，①小学校における英語教育の現状と課題，と②小学校における英語教育の目標と内容の2点を，簡単に概観する。

1. 1 小学校における英語教育の現状と課題

まず，小学校における英語教育の現状と課題については，次の3点において小学校英語教育を充実させる必要があると報告されている。一つ目は，小学生の柔軟な適応力を生かすことによる英語力の向上である。これは最近の小学生はテレビ等を通じて外国人や異文化に接する機会が多いことから，現在中学校で実施されている挨拶，自己紹介などの活動は小学生によりふさわしいものであり，このような活動が将来児童の実践的なコミュニケーション能力を育成するうえでの素地となるという可能性である。二つ目はグローバル化への進展への対応であるが，国際的に小学校での英語教育の必要性が高まり，英語科の小学校への導入が進んでいることや，国内でも保護者等から小学校英語教育の必修化への期待が強くなってきていることから，小学校での英語教育を充実することにより，次世代を担う子どもたちの国際的視野に立つコミュニケーション能力を育成する必要性である。三つ目は，教育の機会均等の確保であるが，現在全国の90%を超える公立小学校で，総合的な各週の時間等において英語活動が実施されているが，活動内容や授業時間数にはかなりのばらつきがあり，中学校入学時に共通の基礎がもてるよう，必要な教育内容を提供する必要性である。

1. 2 小学校における英語教育の目標と内容

次に，小学校英語教育の目標と内容はどのように捉えられているであろうか。外国語専門部会は以下のように報告している。

1. 2. 1 教育目標

小学校段階の英語教育の目標については，まず次の大きな2つの考え方が

示されている。

①小学校段階では、音声を柔軟に受け止めるのに適していることなどから、音声を中心としたコミュニケーション活動や、ALT（外国語指導助手）を中心とした外国人との交流を通して、音声、会話表現、文法などのスキル面を中心に英語力の向上を図ることを重視する考え方

②小学校段階では、言語や文化に対する関心や意欲を高めるのに適していることから、英語を使った活動をするを通じて、国語や我が国の文化を含め、言語や文化に対する理解を深めるとともに、ALTや留学生等の外国人との交流を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、国際理解を深めることを重視する考え方

以上の2つの考え方は、前者が英語のスキルをより重視する考え方であるのに対し、後者は国際コミュニケーションをより重視する考え方である。

そのうえで、外国語専門部会として、総合的に勘案し、中学校での英語教育を見通して、何のために英語を学ぶのかという動機づけを重視するとの観点や、言語やコミュニケーションに対する理解を深めることで国語力の育成にも寄与するとの観点から、②の考え方を基本とすることが適当であるとし、この場合でも①の側面について、小学生の柔軟な適応力を生かして、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、聞く力を育てることなどは、教育内容として適当と考えられる、としている。どちらにしても、実践的コミュニケーション能力を重視していることになる。

1. 2. 2 中・高等学校における英語教育との関係

外国語専門部会は、小学校の英語教育を充実するに当たって、小学校の教育目標を以下のような方向で検討することが適当であると報告している。

その方向とは、小学校段階の子どもの柔軟な適応力を生かすことが有効であり、基本的な単語や表現を用いて、英語で聞くこと、話すことなどの言語活動を実際に行ってみることにより、英語を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ったり、言語や文化への体験的な理解を図ったりすること、併せて英語の音声や会話に慣れることが適当であるということである。さらに同部会では、その際、英語に対する児童の関心・意欲

を高めるため、子どもの発達段階にふさわしい言語の使用場面を設定することが必要であるとしている。

1. 2. 3 教育内容

外国語専門部会は、教育内容として、子どもにとって身近な言語の使用場面を設定し、英語でのコミュニケーションに対する積極性を身につけさせ、適したテーマで言語や文化（国語・日本の伝統文化など）について理解させることが適当であるとしている。さらにテーマにふさわしい基本的な単語や表現例を用い、音声面中心のスキルを身につけさせ、また英語を学ぶことにより、異文化理解ばかりでなく、国語や自国文化についても併せて理解を深めることが可能な内容必要であると述べている。

ここから、小学校英語教育では、とくに音声面中心のコミュニケーションが重要視されていることがわかる。

2. 小学校英語教育の実施状況現状

さて、それでは、小学校英語教育の実情はどうなっているのでしょうか。

2. 1 平成18年度小学校英語活動実施状況調査結果から

文部科学省は、全国の公立小学校を対象に、平成15年度から毎年小学校英語活動実施状況調査を実施しているが、4回目となる18年度は、対象校が22,031校であった。主な結果は以下のとおりである。

まず、英語活動実施学校数であるが、全国の公立小学校22,031校のうち、21,116校が何らかの英語活動を実施しており、実施割合は95.8%になっている。なお、平成17年度の実施割合は93.6%であり、前回より2.2ポイント増加していた。

また、平成18年度小学校英語年間実施時間数は表1に示すとおりであるが、3年生以上では約85%が総合的な学習の時間内で実施されている。

次に、英語活動年間平均時間数は表2に示すとおりであるが、6年生でみると、14.8時間となり、平成17年度は13.7時間であったので、1.1時間増え

表1 平成18年度小学校英語年間実施時間数

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
総合的な学習の時間			85.6%	84.7%	84.7%	85.0%
特別活動（クラブ活動や学校行事など）	59.0%	59.0%	1.9%	3.0%	2.9%	2.8%
その他（教育課程外の時間）	31.3%	30.9%	1.8%	1.7%	1.7%	1.9%
研究開発学校、構造改革特区における教科等としての実施	9.7%	10.0%	10.7%	10.5%	10.7%	10.3%
計	100% (148,478 時間)	100% (153,098 時間)	100% (263,740 時間)	100% (272,11 時間)	100% (291,847 時間)	100% (304,236 時間)

表2 活動時間数別学校数

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
1～3時間	27.4%	26.4%	14.6%	13.6%	12.2%	11.1%
4～11時間	51.4%	52.0%	44.2%	43.9%	42.3%	42.7%
12～22時間	16.1%	16.2%	24.9%	25.5%	25.6%	25.7%
23～35時間	4.2%	4.5%	13.3%	13.9%	16.4%	16.8%
36～70時間	0.9%	0.9%	3.0%	3.1%	3.4%	3.6%
71時間以上	0.02%	0.02%	0.04%	0.04%	0.05%	0.1%
計	100.0% 17,401校	100.0% 17,579校	100.0% 19,775校	100.0% 19,975校	100.0% 20,173校	100.0% 20,576校

ていた。ここから平成18年度には6年生で毎月1回強の割合で活動が行われたことがわかる。

また、英語活動の主たる指導者であるが表3に示すとおりである。この項目は「学級担任」「英語指導担当教員」「中・高等学校の英語教員」「特別非常勤講師」「その他（校長・教頭など）」の5項目で調査が行われた。表2から、各学年とも指導者は学級担任が多く、いずれも90%以上になっている。

さらに、活動内容であるが、その結果は表4に示すとおりである。各学年とも、「歌やゲームなど英語に親しむ活動」が95%以上となっている。6年生でみると、「歌やゲームなど英語に親しむ活動」は97.6%となっており、前回の調査時の97.1%よりわずかに数値があがっている。

文部科学省は、小学校英語教育において文字指導を推奨していないが、こ

表 3 英語活動の主たる指導者別時間数

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
学級担任教員	94.8%	94.7%	94.6%	94.1%	93.5%	92.9%
英語指導担当教員	1.7%	1.8%	2.0%	2.1%	2.1%	20.8%
中・高の英語教員	0.4%	0.4%	0.5%	0.5%	0.9%	1.4%
特別非常勤講師	1.8%	1.8%	1.7%	1.7%	1.8%	1.9%
その他(校長, 教頭等)	1.3%	1.3%	1.3%	1.6%	1.9%	1.7%
計	100.0% 148,478 時間	100.0% 153,098 時間	100.0% 263,740 時間	100.0% 272,115 時間	100.0% 291,847 時間	100.0% 304,236 時間

表 4 活動内容 (複数回答)

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
歌やゲームなど英語に親しむ活動	99.3%	99.3%	97.7%	98.5%	98.5%	97.6%
交流活動など実体験を通じて英語や異文化に触れる活動	36.5%	36.8%	40.3%	41.4%	43.7%	45.0%
簡単な英会話(挨拶, 自己紹介)の練習	84.5%	87.0%	93.2%	95.1%	96.3%	96.4%
英語の発音の練習	63.3%	64.4%	72.6%	74.2%	76.9%	77.7%
文字に触れる活動	17.7%	18.9%	29.0%	34.5%	42.8%	46.8%
その他(上記に属さないもの)	2.5%	2.6%	3.1%	3.0%	3.7%	3.9%

の結果をみると、文字を扱う活動がどのようなものなのかについての詳細は不明であるが、第1学年から17.7%の小学校が文字に触れる活動を開始しており、第5学年では42.8%、第6学年では46.8%となっており、小学校高学年では全小学校の4割強の小学校が何らかの文字に触れる活動を行っていることが見て取れる。

3. 英語の文字導入に関する児童、生徒の意識について

3. 1 小学校英語活動における文字の導入に関する調査

筆者は、平成15(2002)年12月に、C県S町の小学校全8校の6年生416名、中学校全4校1年生468名、同2年生257名を対象に小学校英語活動に関する意識について調査を実施した。なおここにあげた対象者は有効回答数で

ある。調査を実施した旧S町は、首都圏30kmに位置する調査当時人口約46,000人の町であったが、現在は隣接していたK市と合併している。旧S町では平成12年4月より町独自の取り組みを開始した。国際理解教育の一環としての「小学校英語活動」であったが、その目的は、英語活動の実施をとおして児童が異文化を理解し、共に生きていく資質や能力、コミュニケーションの基礎的能力を育成することであった。旧S町では小学校教員のみにより小学校英語活動カリキュラムが作成され、年間10時間程度の活動が実施されていた。

当時、調査の対象者となった中学1年生は全員が小学校英語活動を経験し、中学校2年生は小学校自由裁量により、小学校英語活動を経験したことのない生徒もいた。この調査の目的は、小学校英語活動を経験している途中の6年生、かつて小学校英語活動を経験したことのある中学1年生、中学2年生の同活動に対する意識を明らかにすることであった。また、中学校2年生を対象に小学校英語活動の経験の有無による意識の差があるかどうか併せて明らかにすることを目的としていた。

調査項目は全部で39項目であったが、ここではこの39項目のうち文字の導入に関する6項目を取り上げ、結果を紹介する。文字の導入に関する質問項目内容は小学6年生用の項目を例に取ると、「アルファベットを読めるようになりたい」「アルファベットを書けるようになりたい」「かんたんな英語の単語を読めるようになりたい」「かんたんな英語の単語を書けるようになりたい」「かんたんな英語の文を読めるようになりたい」「かんたんな英語の文を書けるようになりたい」であった。なお、調査実施当時旧S町の小学校では英語の文字の導入は行われていなかった。

アンケートの形式は、「5 まったくそう思う」「4 どちらかというと思う」「3 どちらでもない」「2 どちらかというと思わない」「1 まったくそう思わない」から成る5段階尺度形式であり、各項目の結果を1から5の数値に換算した。

3. 2 小学生の文字の導入に関する意識

小学校6年生児童の文字導入に関する各項目の平均と標準偏差を求めたが、その結果は表5に示すとおりである。

表5 小学校6年生児童の文字導入に関する各項目の平均と標準偏差(SD) (N=416)

項目	項目内容	平均	SD
1	アルファベットを読めるようになりたい	4.19	1.22
2	アルファベットを書けるようになりたい	4.23	1.19
3	かんたんな英語の単語を読めるようになりたい	4.23	1.15
4	かんたんな英語の単語を書けるようになりたい	4.18	1.20
5	かんたんな英語の文を読めるようになりたい	4.24	1.17
6	かんたんな英語の文を書けるようになりたい	4.20	1.22

さらに、この6項目について解釈しやすいように5段階尺度の5と4を肯定、3を中立、2と1を否定とし、その度数を再集計し、 χ^2 検定を行った結果は表6に示すとおりである。

表6 小学校6年生児童の文字導入に関する各項目の集計結果と χ^2 検定結果(N=416)

項目	集計結果			χ^2 検定結果		
	肯定	中立	否定	$\chi^2_{(9)}$	p	多重比較 (p<.05)
1	311	66	39	323.88	**	肯定>中立>否定
2	312	72	32	330.76	**	肯定>中立>否定
3	319	61	36	354.03	**	肯定>中立>否定
4	320	55	41	375.87	**	肯定>中立 \approx 否定
5	325	50	41	375.87	**	肯定>中立 \approx 否定
6	320	56	40	356.61	**	肯定>中立 \approx 否定

**p<.01

以上の表5、6の結果であるが、まず表5をみると、アルファベットの読み書き、簡単な英単語の読み書き、簡単な英文の読み書きについて、各項目の平均は5点満点中、4.19から4.24を推移していた。次に表6の χ^2 検定の結果をみると、アルファベットの読み書き、簡単な英単語を読むことについては肯定的な意見が最も多く、次いで中立の意見、否定的な意見という順になっていた。また簡単な英単語を書くこと、簡単な英文の読み書きについては、すべての項目において肯定的な意見が中立的な意見と否定的な意見より強く、中立的な意見と否定的な意見の間に差はなかった。以上の結果から、児童はアルファベットを読むこと、書くこと、簡単な英単語を読むこと、書くこと、簡単な英文を読むこと、書くことについて圧倒的に肯定的な意見が多く、児童の文字を学びたいという意欲が強いことが明らかになった。

2. 3 小学校英語活動を経験した中学生の文字の導入に関する意識

次に、小学校時代に英語活動を経験した中学1年生468名、中学2年生219名の以下の4項目に対する平均と標準偏差は表7に示すとおりである。

表7 小学校英語活動を経験した中学1年生、2年生の各項目の平均と標準偏差(SD)

項目	項目内容	中学1年生 (N=468)		中学2年生 (N=219)	
		平均	SD	平均	SD
1	小学校でかんたんな英語の単語を読む学習をしてみたかった	3.69	1.24	3.16	1.41
2	小学校でかんたんな英語の単語を書く学習をしてみたかった	3.70	1.26	3.21	1.35
3	小学校でかんたんな英語の文を読む学習をしてみたかった	3.64	1.28	3.23	1.39
4	小学校でかんたんな英語の文を書く学習をしてみたかった	3.60	1.31	3.14	1.39

また、この4項目の平均と標準偏差に基づき、分散分析を行った結果は表8に示すとおりである。

表8 中学1年生、2年生の文字導入に関する各項目の分散分析結果 (N=416)

項目	1年生 (N=468)		2年生EX (N=219)		分散分析結果		
	平均	SD	平均	SD	F _(1,685)	p	大小比較
1	3.69	1.24	3.16	1.41	25.25	**	1 > 2
2	3.70	1.26	3.21	1.35	21.80	**	1 > 2
3	3.64	1.28	3.23	1.39	14.52	**	1 > 2
4	3.60	1.31	3.14	1.39	17.26	**	1 > 2

**p < .01

表7、8をみると、中学1年生の方が、英単語や簡単な英文の読み書きを小学校時代に経験してみたかったという意識が強いことがわかった。しかし、各項目の平均は中学1年生で3.60から3.70、中学2年生で3.14から3.23を推移しており、小学校時代の英語の文字学習への気持ちが遠いものになっていると推測される結果となっていた。

5. 英語の文字導入に関する試験的試みについて

5. 1 コミュニケーション能力伸長としての文字指導について

これまで、文部科学省の小学校英語教育の位置づけと小学校英語活動実施状況、児童・生徒の英語の文字指導に関する意識についてみてきた。

まず、文部科学省は小学校英語教育の目標として音声によるコミュニケーション能力の伸張を重視していることが確認できた。次に、平成18年度の調査結果から全学年をとって活動の90%以上を学級担任が担当していた。しかし、実際にはALTが小学校を訪問したときに、活動のほとんどをALTに任せている場合も多いのではないだろうか。また、英語活動年間平均時間数は6年生でみると、14.8時になっているが、年間の英語が小学校に導入されれば、週1回の実施であったとしても年間35回の予定であり、学級担任が指導する時間数が今以上に増加することは間違いがないであろう。しかし、英語を専門としない小学校教員が多いことから、音声面中心のコミュニケーション活動を実施していくことはかなり困難であることが予想される。英語を専門としない小学校教員は、かなりのクラスルームイングリッシュを身につければ、クラス内での児童の指導のほとんどの場面をカバーできると考えられる。しかし、そうはいつても教師の英語力がかなりのレベルに達していなければ、アドリブ的な英語表現はかなりむずかしいし、ALTとの授業の打ち合わせも困難であろう。英語の指導が音声面に偏重するのであればの英語を専門としない小学校教師の負担がますます増えることになろうが、このような教師の立場からも、文字を用いる指導が可能になれば、現在全国の公立小学校で広く実施されているゲームの内容としても、ただ楽しいだけで遊びに近い内容ではないゲームが考案できると考えられる。

また、少し前の資料となるが、文部科学省による小学校の英語教育に関する意識調査結果の概要（初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会第6回〈2005年3月11日〉資料6）では、児童が英語活動が嫌いな理由として「英語をうまく読むことができないから」が50.4%となっている。文部科学省の指針では小学校では文字指導を推奨していないので、普通の公立小学校では文字指導が積極的に行われているとは考えられないことを考えると、児童がうまく読めないことを気にしているものと考えられる。

事実、外国語教育において、文字はコミュニケーションのもう一つの道具

であることが指摘され、子どもたちの表現力やコミュニケーション能力育成のための文字指導のあり方が、中学校での英語教育との関連からも、さらに模索されるべきであることが述べられている（樋口編，2005）。

また、小学生に英語を指導するうえで知っておくべき小学生の発達段階と学習特性として、「9歳の壁」があり、それ以前と以降に大別されることが多い。「読むこと」について9歳以前の小学生は、人に読んでもらうことが好きだが自分では読めないことと、絵本のどこを読んでいるかわからず、絵の方をみるということが指摘されている。一方、9歳以降の小学生は、読むこと・読めることが嬉しく、単語をみて、聞いたり発音するうちに発音と文字の関連に慣れると言われている（樋口他編，2005）。

小学校では現在4年生でローマ字を学習していること、児童はNHK、Jリーグ、JR、JUSCO、P（パーキング）など、アルファベットの大文字を日常生活で目にする機会が多いことから、児童の文字への抵抗感はかなり低いものと推測され、筆者は中学年から積極的に文字を取り入れていくことが可能であり、児童も無理なく学習ができるのではないかと考えている。

5. 2 小学校英語教育での文字指導の試み

筆者は、かねてより小学校英語活動に文字を積極的に取り入れていくことに賛成である。

筆者は、現在小学校では4年生でローマ字の学習が行われること、以上の児童の発達特性の理由から、ローマ字が未習の3年生段階でアルファベット文字を導入してみることを希望していた。幸い筆者の所属する大学の附属小学校と当時3年生の学級担任の全面的協力が得られ、2006年秋から、3年生1クラスにおいてアルファベットを導入する試みが可能となった。

授業の形式は、研究生1名、学部生2名の計3名によるティーム・ティーチングとし、出張授業の形で、2006年の10月から12月にかけて原則として2週間に1度、計4回の授業を行った。授業の題材は英語のアルファベットの大文字と小文字であり、3年生児童が大文字26と小文字26を全部読めるようになることが目標であった。大文字は1回（30分×2モジュールの60分）の

授業で、小文字について a から z までの26文字を、①a から j、②k から t、③u から z の3部に分け、3回(30分×2モジュールの60分)の授業で行った。

授業は毎回、歌、文字を読む練習、ゲームの順で行った。ここで用いた英語の歌は ABC Steps であるが、これは New Let's Sing Together (阿部フォード恵子編著、アプリコット)からのものである。この歌は Seven Steps のメロディに乗せ、歌詞はアルファベットのみで構成されている歌である。ゲームについては楽しさの要素を取り入れながら、アルファベットの定着を図るものを工夫した。大文字のみのカルタ取り、小文字のみのカルタ取り、小文字と大文字を混ぜたカルタ取り、教師が大文字を示し児童がその小文字を取るカルタ取り、大文字と小文字の神経衰弱ゲームを行った。アルファベットを直接教える部分についても、毎回の児童の様子から、b と d の鏡文字に混乱が見られたことから、b と d についてはとくに何度も読む練習を繰り返した。

大文字と小文字のすべてを導入した4回の授業終了後に、「アルファベットを勉強してよかったこと」について児童に感想を記述してもらったが、以下のような感想であった。

- ・子分が全部覚えられてよかった。
- ・子分26人の顔を覚えた。
- ・小文字がたくさん覚えられて自分の名も覚えられた。
- ・26人の子分の顔を覚えられたこと。
- ・小文字が覚えられたこと。
- ・アルファベットを全部覚えた。
- ・何か言っていたことがよく分からなかったけど、やってきて、わかってよかった。
- ・子分やカルタなどがよくわかった。
- ・小文字が全部を覚えて、楽しく授業できたのがよかったです。
- ・カルタや神経衰弱で26人の子分を覚えられてよかった。
- ・子分と親分の顔を覚えられたこと。

- ・子分や親分が分かったことがよかった。
- ・前よりもっと英語が好きになった。英語が身についた。
- ・くわしく英語をおしえてくれてよかった。
- ・26人の顔を覚えてQが分からなかったけど、分かるようになった。
- ・いろいろわかった。(ABCソング)
- ・今日は、大文字小文字を覚えられてよかったです。
- ・完全に小文字、大文字を覚えられた。
- ・前は大文字しか分からなかったけど小文字も勉強したからすらすら言えるようになった。
- ・自分から進んで楽しくできた。
- ・大体小文字が覚えられた。
- ・子分26人を覚えられてすごくよかった。
- ・英語が覚えられてすごくうれしかった。
- ・小文字を覚えた。ABCソングも覚えた。
- ・小文字を覚えられてよかった。楽しみながら勉強できてよかった。
- ・子分を知っていたけど、でも楽しく新しく覚えられてよかった。
- ・ABCソングでアルファベットが上手に言えるようになった。

以上の児童の感想から、児童が楽しんでアルファベットの大文字、小文字を学習したことが見て取れる。とくに、小文字がわかるようになり良かったなど、小文字についての感想が半数以上であった。全国の小学校で通常行われていると思われる英語に親しむことを目標としたゲームではなく、筆者は児童に英語をなるべく多くインプットすることを目標としたゲームをこれまで上越市内の公立小学校で学生の出張授業を通して実施してきた経緯があるが、児童の感想の中には、少数ではあるが、つまらなかったという否定的なものもみられることが普通であった。今回の文字学習の感想には、そのような否定的な内容の感想がみられなかった。

授業の実施も2週間に1度のペースであり、毎回児童が前回の授業内容をどのくらい覚えているのかが不安であったが、実際には毎回の授業で短い時間で復習をするだけで、何の問題もなくスムーズに学習が進んだ。

今回は対象が小学3年生であることもあり、数値によるデータがあまり信頼できないこともあり、客観的データとしては提示していない。そこでデータによらない筆者の正直な感想に過ぎないが、今回の児童の様子を観察したところ、児童の理解力と積極性には改めて目を見張る思いを味わった。

今回の試みは、毎回の所要時間は約45分であった。大文字1時間、小文字3時間の計4回の授業で英語の文字学習が終了できることが確認できた。本稿では扱っていないが、この文字学習の後にアルファベットのフォニックス読み学習も実施している。今後の課題は、今回の試みの結果を基に、フォニックス読み学習まで含めてさらに内容を修正し、一つの方向性としては短期集中型文字学習、もう一つはゆっくり時間をかけ、授業の一つの活動として文字を教えていく長期分散型文字学習の二つのタイプの英語の文字学習プログラムを構築していくことである。

〈引用・参考文献〉

- (1) 樋口忠彦他編『これからの小学校英語教育——理論と実践』2005, 研究社。
- (2) 北條礼子・松崎邦守「小学校英語教育に対する生徒・保護者の意識調査：山梨県Ⅰ 中学校の場合」『上越教育大学研究紀要』2003, 23, 1, pp. 1-10.
- (3) 岡秀夫・金森強編『小学校英語教育の進め方』2007, 成美堂
- (4) 特定非営利活動法人小学校英語指導者認定協議会編『どうなる小学校英語「必修化」のゆくえ』2004, アルク
- (5) 鳥飼久美子『危うし！小学校英語』文春新書, 2006, 文藝春秋社
- (6) 文部科学省 HP <http://www.mext.go.jp/>